

アルブレヒト・ハウスホーファー
『モアビート・ソネット集』管見

横塚祥隆

(一)

アルブレヒト・ハウスホーファは、一九四五年四月二四日の夜、他の十三人の囚われ人と共に「移送」の口実のもとに、ベルリン・レールター・シュトラッセのゲシュタポの刑務所から親衛隊によって連れ出され、近くの瓦礫の原で銃殺された。重傷を負いながらも生き延びた一人の若い共産党員のお蔭で、数週間後にハウスホーファの遺体も発見された。その遺体の手には、「鉛筆でいっばいに書き込まれ、血痕のついたA4判の十二枚の紙片」がしっかりと握られていた。後に『モアビーター・ソネット』として知られるようになった八十編のソネットが書きつけられていた。^①

その八十編のソネットを、広い意味で、また相互に重なり合いながらであるが、「獄中での見聞」、「回想と省察」、「ナチス的なものとの対決」などに区分して見ることもできよう。^②しかし全体を素直に眺めれば、これらの一連の詩が、何らかの契機によって著者の内に呼び覚まされたその時々^③の自由な連想によって綴られていることも見えてくる。

冒頭に置かれた幾編かのソネットは、おそらく收容された初めの頃に生まれたことを思わせる。

いま自分が入っている独房の壁を通じて伝わって来る、これまでにそこを通り過ぎて行ったものたちや同じ獄舎につながれている「兄弟たち」の思い(『いましめられて』)は、「死者たちの最期の思い」をも呼び寄せ(『夜の使者』)、さらに独房でそのものたちの声に耳を傾けようとする自分の姿には、「僧房の中に、思

索に耽っている」東洋の賢者の姿が溶け合い、その賢者から「魂の厳しく律せられた光」を投げ掛けられた
 『チベットの神秘』ハウスホーファの思いは再び独房へともどり、隣人たちに呼び掛ける、「心配すること
 はない——きみたちもまた生きるのだ」(『波の呼び声』)と。

おそらくこの「きみ」には、死者たちの呼び声を身近に感ずるハウスホーファ自身も含まれているのだろ
 うが、それに続く二編には、生の目的も意味も見失ってしまったかのような著者の死への思いが、洩らされ
 ている。

何が私をまだ引き留めているのか——入口は目の前に開いている。

われわれには許されていない、抜け出すのは、

われわれを苦しめるのが、神であれ、悪魔であれ。

『入口で』⁽⁴⁾

あるいはむしろ死への憧れが、ソクラテスが毒杯を仰いだと言われる故地の思い出に重ね合わされている。

いま私は悔やんでいる、そこを通り過ぎてしまったのを。

ふさわしかったであろうものを、跪いて

それと知りつつ毒人參の杯をともに飲み干すことこそ。

偉大だった、心遅しく、

自国の闇雲な死の暴力に

犠牲となってまで誠を報いた、その人は。

『毒杯』⁽⁵⁾

前者の「入口」(Schwelle)が、後者の二行目の「そこ」に、つまりソクラテスが死を待っていた獄舎の「暗い入口」(an der dunklen Schwelle)につながっていることは容易に読み取れて、むしろ「境界」、「境目」とした方がふさわしいかも知れないが、要するに独房にあって死者たちの声を耳にしているハウスホーファの思いが、生と死との境界線上で揺らめいていることを感じさせる。

そこにはエマリヒが指摘するように、「自死」への思いを読み取ることもできようが、死の予感、覚悟あるいは死への親しみをうたったものは、この他にも少なくない。そうした心情が、みずから望んだのではない死がほぼ確実である獄中で綴られたこの『ソネット集』の通奏低音になっているとしても、むしろ当然のことだろう。

刺すがよい 小さな羽根のある生きものよ、

お前を養えるだけの血が私にあるかぎり、

お前がお前の短い生を思い煩うかぎり。⁽⁶⁾

血を吸いに来た蚊に、生命のいとおしさを見出しながら同時にハウスホーファは、その小さな命の営みに裏返しの死を透視しているのだろう。自分の命がやがてその蚊のように暴力的に叩き潰されることを予感しているだろう。あるいはまた、

時にはお客もやって来る 私の牢獄

鉄格子 ほかのものには休息所

よく来るお客は すぐめのアヴェック

お嬢さんすぐめとすぐめのナイト。

痴話喧嘩で愛し合い

嘴すり寄せ たくさんおしゃべり

よそのナイトが ちょっかい出せば

たちまち起こる 必死の闘い。⁽⁷⁾

死の影など無縁のように見えるほほえましい光景からはじまる『雀』と題されたこの一編は、先の『蚊』と題されたものにおいて置かれている生きものの連想の産物でもあろうが、獄舎の窓辺に飛んできた数羽の雀の生き生きした姿を静かに眺めているハウスホーファの心の安らぎを想像させる。しかしその可愛らしい生きものたちの動作が、かえって作者自身にその胸奥を覗き込ませ、安らぎの底に隠されたものを気付かせる契機になってもいる。

遠くを見詰め。一声鳴いて、羽ばたき一つ、

鉄の止まり木空っぽう。私は一人。

どんなにいいか 雀の仲間になれたら。

自由への憧れ、と言ったら陳腐に過ぎるだろうか。だがそう思うのは、行動の自由を楽しむことのできるも

の驕りかもしれない。感傷的に過ぎるような心情の素朴なあからさまな表出にハウスホーファは、自分の命が飛んでいってしまった小さな生きものと同じように遠いものであることを、感じ取っているのではないか。

ハウスホーファを覆うそうした死の影は、しかしその身边・日常の範囲を越えた広がりをも持っている。力と栄光に満ち溢れた若者に、死を運命づけられたものたちを思い浮かべ、『オリンピック』、『国々を駆け抜けて来た明々と燃える松明は、燃え上がる世界の姿を反映し（『松明のヴィジョン』）、声高に総力戦を叫ぶものたちによる歴史と文明の破壊を予見し（『機械の奴隷』）、死んだ友人たちの招きに従うべきかどうか思い巡らす（『友人』）。ハウスホーファの心情は、たしかに死へと傾いている。

遙か東洋の島国の蒼海の聖所に「……汚れなく保て／永しえにその霊たちの存在を」（『ミヤジマ』）と呼び掛ける時には、すでに霊となった自己の存在を思っているのかもしれない。そのハウスホーファは、また先祖から伝えられた紋章付き指輪を甥の手に託し、

そして伝えてください、白鳥の飛翔は幸運を意味すると……

その甥が かつてその遺産を負っていたものを

一年に一日でも偲んでくれれば、それで十分だと。

『白鳥の指輪』⁽⁸⁾

そう母に向かって語りかけてもいる。もはやみずからを亡きものとして眺めながら、同時に伝統の継承と新しい歴史の展開を期待し、確信している。

しかしいま世界に求められているのは、芸術家と同じような忍耐をもってする「仕上げ」だ（『雉』）と説いてもいるハウスホーファを「引き留めているのは」、おそらくその胸の奥に響く自死の「定言的拒否」のみではなく、一時代の終焉を实見したいという願いだっただようにも思われてくる。その願いが果たされるかどうか、自分に残された時間は少ないことを冷静に見詰めているハウスホーファを、最後のソネットに見出すことができよう。

その時私は悟る、夢を妨げられて、
權のないポートの縛りつけられて、

ナイアガラの滝の轟音を耳にするものが、

最期に臨んでどんな気持ちでいるかを。

水がポートの縁を打つ。

流れは急だ。縛られたままの……手。

『時』⁽⁹⁾

(一)

知識

純粋科学のあらゆる手だてを用いて

わたしは試みた、究明できるものは究明し、
わかっていることははっきりと、曖昧なものは曖昧なままに言おうと――、
自分の考えはいつも厳しく簡潔にまとめた。

海も陸も至るところをめぐり歩き、

オデッセウスのように波乱の時代に

人々の心情と人々の悩みを知り、

次第に私の世界像が形成された。

それから 行動に振り向けようとした

知識の恵みを。だが重荷を感じていないものたちは

高笑いで嘲った、四方の風がわたしに教えてくれたことを。

いまや暗闇の中ですべての道が尽きようとしている。

知識は闘いを前にして 動きがとれない。

それが遺してくれた最良のものを平常心という。^⑩

自己の半生を走馬灯のように思い浮かべながら、ハウスホーファはいまそれらすべてを「平常心」をもって受け入れようとしている。もちろんハウスホーファが必ずしも投獄されたそのはじめから「平常心」を保っていたのではないことも、なすべきことはすべてなした終え、焦燥とも諦めともまた不安や恐怖とも無縁な境地にいたたのではないことも、(一)において瞥見したところから、おおよそは窺い知れよう。五十九番目に置かれたこのソネットが獄舎で過ごした約四ヶ月半の日々のいつ頃書かれたものか定かではないが、この頃には来し方行く末に思いめぐらす平静さを得ていたようにも見える。

ここで「純粹科学」と言われているのは、地理学・地政学を基礎としたその学問的素養のことと思われる。第二節は、外務省の委託を受けた任務によって、あるいは旅行好きのハウスホーファが世界各地を経巡り、少なからぬ知己を獲得し、見聞を広めつつ現実観察の目を養ったこと。

「知識の恵みを行動に振り向けようとした」が暗示するのは、ナチ政府の外交政策に自分の知見を反映させようとし、警告を発し、同時にヒトラー打倒を企てた活動家たちとの協力。

「いまや暗闇の中ですべての道が尽きようとしている」とは、独房の「暗闇の中で」尋問をまわっているハウスホーファ自身の死への予感、あるいはその自己の姿に重ね合わされた敗戦必至のドイツの運命であるかも知れない。

そのようにこの一編の詩を読むことは、ハウスホーファの経歴を知ってしまえば、さして難しいことではないが、それを手短かに言えば、体制内改革からヒトラー打倒へと徐々に傾いていったナチ時代の保守的知識人の悲劇的歩みということになる⁽¹⁾か。

アルブレヒト・ハウスホーファは、ドイツにおける地政学の創設者とされるカール・ハウスホーファ⁽¹²⁾を父として一九〇三年ミュンヒェンに生まれた。三九年ベルリン大学で地理学・地政学の教鞭をとるようになったその経歴⁽¹³⁾は父の後を継ぐもののように見えるが、父の思想あるいは活動に対する見方・評価には複雑なものがあったようである。

父は封印を破った。

悪の息吹が父には見えていなかった。

デーモンを父は世界に拡散させた。

『父』⁽¹⁴⁾

ハウスホーファのその父の学問的業績や活動に対する評価を示す文書などは筆者の管見に入っていないので、上の一節についても具体的なことを付け加えることはできない。しかしどうやら父カールの英雄待望的生存圏説⁽¹⁵⁾に関りがありそうである。

地上での生存圏を巡って闘う文化の担い手たる支配民族が、「ヤヌスの神殿」、即ち国民社会主義の扉をあけるといふカール・ハウスホーファ自身が、その英雄を自認していたわけではなからうが、たとえ利用あるいは誤用されたにせよ、その学説がナチの膨張政策に寄与したのだとすれば、ここで息子が「封印を破った」のは父であるというのものははずれではないだろう。しかしこの詩の前半には、そうした息子による父親批判以上に興味深い、息子自身の国民社会主義に対する一種の決定論的見解が吐露されている。

東洋の昔話によれば、邪悪な力を持った霊たちを神が暗い海に封印し、千年に一度漁師がそれらを解放するという。その解放者役に選ばれたのが父のカールであるということなのだろうが、ハウスホーファはここで殊更父を非難しているのではなさそうである。人間が悪と善との間の選択を、いずれは敢えてしなければならぬとすれば、父はたまたま運命によって指さされたものにすぎない。邪悪な力を持った霊たち、つまり国民社会主義と置き換えて差し支えないはずのある力が歴史のある時期に現れるのは、ハウスホーファにとってはほとんど自明のことなのだ。そして今自分が身を置いている時代こそは、神への信頼を失い、『神への信頼』、滅びへと向かっている歴史の一時期の終末に位置しているとハウスホーファには見えている。

われわれが最後のもの。われわれの思想は

明日には命のない屑になり、風に吹き飛ばされ、

価値を失う、瑞々しく夜が明けるときには。

『遺産』¹⁶

人為によれ、超自然的意志によってであれ封印から解き放たれた力は、もはや止めようもなく最後までその猛威をふるうことを、かつて故郷の山脈に目撃したであろう雪崩に託して暗示している（『雪崩』）ハウスホーファは、しかしそれでもなおその歴史を司っているより高い力の存在を確信してもいた（『コスモス』）。そうした力や至高の存在、神や霊、また十字架に付けられる、あるいはグリニューヴァルトの祭壇画によった栄光のキリストに言及されている（『蘇りしもの』）例も少なくないが、それらが必ずしもハウスホーファのキリスト教信仰を証しているのではない。ハウスホーファの基盤となっていたのがたとえ「キリスト

教的ヒューマニズム⁽¹⁷⁾であるにせよ、「邪悪な霊」を束縛した神をキリスト教的神であると見做すのは、早計に過ぎよう。厳島神社(『ミヤジマ』)や鎌倉の大仏(『オム・マニ・パドメ・フム』)また『カミ』などに見られるように、神聖なるもの、霊的なものへの畏敬の念を吐露しているハウスホーファは、人間が犯してはならない神聖な領域と掟の存在を指示しているのみなのである。そして父はその存在を見失っていたと息子は、冷静に眺めている、

父はなおも力を夢見て、ものが見えなかった。

わたしは危機をすっかり予感していた。

『アケロン』

ハウスホーファは、父とは対照的に自分をカサンドラになぞらえてもいる(『カサンドロ』)のだが、任務によってあるいは旅行好きの彼が「海も陸も至るところをめぐり歩いた」、その時々旅行などから得た知見を報告する際には、その決定論者的思考に矛盾するようだが、冷静なりアリストの目を持って現実の推移を眺めている⁽¹⁸⁾。

(三)

そのリアリストとしてハウスホーファは、「知識の恵みを行動に振り向けようとした」。息子はその父とは違って、早くから国民社会主義によって引き起こされようとしているものが、「非常に大きく全般的な、個人の破局などやがては問題でなくなるような破局」であることを見通していた⁽¹⁹⁾。それにもかかわらずナチ政

府の外交政策に自分の知見を反映させようとし、ナチによるユダヤ人排斥の宣言とも言うべき「ニュルンベルク法」が制定された三五年には、ヘス宛に「非アーリア人問題の別種の解決策」という建白書を提出して、最悪の事態を防ごうとした。⁽²⁰⁾ またことにイギリスとの対決を避けるべく、優れたイギリス通であったハウスホーファ⁽²¹⁾は、たびたびその見解を『地理学雑誌』に発表した。三八年六月には外務大臣リッペントロップに提出されるべき報告の中で、「イギリス国内ではドイツとの正当な妥協の可能性を探る努力が放棄されていない」が、「国民社会主義の民族ドイツ的政策の背後に新しい帝国主義の臭いが嗅ぎ取られている」ことを指摘し、さらにチェコ問題が試金石として決定的意味を持ち、その解決に「ドイツが武力を行使するならば、イギリスにとっては開戦状態を意味することになる」と予言者の警告を發した。⁽²²⁾ しかしハウスホーファのこれらの報告にリッペントロップは「シークレット・サーヴィスのプロパガンダ」という反応しか示さなかった。ハウスホーファが「四方の風」とはつまりハリファクス卿、ハミルトン卿、ロウシアン卿などイギリス政府上層部に通じる人々との個人的なつながりによって知り得たイギリス事情が、独裁政治下で洞察力を失った、みずからの責任の重さを感じていないものによって、一笑に付されたのだった。

三九年三月のドイツ軍によるプラハ占領後にも、イギリスはもはやミュンヘン協定時代の二の舞いを演じることはないと言っていたハウスホーファは、そうしたことがあつてから次第に現実との関りから身を引き、同年八月の独ソ不可侵条約が締結された際にも、四週間もすれば戦争になり、行き着くところはヨーロッパの没落だという感想を内輪で漏らすだけだった。⁽²³⁾ 大学ではごく小人数のゼミナルで「古典古代的國家形成の地政学 Geopolitik antiker Reichsbildung」をテーマとして取り上げ、古代を語ることによって

現代の問題を暗示しようとしたが、そのハウスホーファの意図は学生たちにも感じとられていたといふ。⁽²⁴⁾

ハウスホーファが学生たちに示した古代像がどのようなものであったか筆者の調査は行き届いていないが、この『ソネット集』には、『焼かれた書物』あるいは『アレクサンドリア』などのように、過去を理想の時代あるいはより良い時代としてではなく、より少ない悪の時代として提示することによって、現代のより大きな悪を暗示しているものがある。

血にまみれたジンギスカンのようなものさえ、

戦士たちに厳しく言い付けていた、

頭蓋骨の山を築く時に、

思想家や芸術家たちはいたわるようにと。

『野蛮』⁽²⁵⁾

強制収容所や刑務所でどのくらいの文学的作品が生み出されたのか、正確な調査が可能であるとは思えないが、⁽²⁶⁾一般的に言って前者においてよりも後者においての方が発見される危険性が大きく、書かれたものの反ファシズムの内容はきわめて一般的なもの、典型的なものにされたり、暗号化されたりしていたと言われている。⁽²⁷⁾伝説的、寓話的枠組に託して語られることの多いハウスホーファの作品もそうしたものに属すると言えるだろう。また上の例のように歴史の意匠を纏ったものも少なくなく、それは多くの国内亡命文学や亡命文学が歴史に取材した作品によって、第三帝国の反対像を示そうとしたことと相通じるものがあるろう。しかしそれらにおいては過去の出来事がカムフラージュとして機能しているのに対して、ハウスホーファの場

合にはカムフラージュと言うより詩的イメージであり、あまりに直截的であり、大胆ですらあるが、それだけ書き手の書くことへの逼迫した欲求の強さを窺わせる。

ナチ的人物を指すのにも「限度なき輩 die Herren ohne Maß」（『偉大な死者たち』）などのような間接的表現が用いられていることが多いが、時には『ネメシス』における悪名高い人民裁判所長官フライスラーのように、名前こそ挙げてはいないもののハウスホーファが誰を指しているのが、誤解の余地なく表れているものもある。さらに次のような一編では、たとえひそかに書き付けられたものとは言え、単なる暗示の域を越えてハウスホーファはかなりの危険を冒しているといえるだろう。

灰色のねずみの群が国中で貪り喰っている。

ねずみたちはひしめきながら大河に近づく。

先に立つのは一人の笛吹き、狂った音色で

奇妙な突進に駆り立てたのだ。

ねずみたちは納屋に穀物が溢れるままにして――

ためらったものは、巻き込まれ、

抗あきらったものは、無差別に噛み殺された――

そして大河に向かった、野を荒らしながら……

『ねずみの行進』²⁸

この行進を眺めているハウスホーファは、自己の位置をどこに置いているのだろうか。あたかも鳥瞰しているかのように、どこか高い所から遙かに見下ろしている感じを醸し出しているのは、いまや獄中にある現実の推移に対して一種の傍観者の位置を強制されているせいなのだろうか。やがて「死んで海へ漂い出る」とねずみたちの行く末をすら見据えているハウスホーファの眼差しは、ここでは冷たくそのねずみたちを突き放している。それとも「いまや暗闇の中ですべての道が尽きようとしている」というハウスホーファは、もはやその行進の行方を諦めの「平常心」で眺めているのだろうか。しかし「ためらったもの」、「抗ったもの」の「もの」にはいずれも Was が使われており、誰彼の区別なく、何事であれ根刮ぎにする、というような無機質で冷酷な感じが付きまとい、**「平常心」と言うにはあまりに醒め過ぎている。**

たしかにハウスホーファは醒めた目で眺めている。だがそれは決して周囲のものに対してばかりではない。まるで自己の「在庫調査」⁽¹⁾をしているかのようなこの『ソネット集』では来し方を振り返り、自己の内面を覗き込む眼差しですら、いとおしむと言うより冷徹とさえ言える光を宿している。「いつまでもとれぬ暗い運命の中へ」向かって立ち去る自分を戸口に立って見送る母との別れをうたった『母』においても、「凍えるでしょう お母さん……お母さん——中に入ってください」と呼び掛けた声にならない声は、いま遙かな故郷の母へ呼び掛けている胸奥の声に重ね合わされているだろう。たしかにそこからは母へのいたわりの気持が十分に伝わって来るものの、その声にならない声で呼び掛けている心象風景の中の自己の姿を、ハウスホーファはむしろ突き放して眺めている。

そうした冷たい醒めた眼差しは、『ネメシス』の最終節では宗教的な厳しさをさえ伴ってすべての「もの」

に向けられる。

裁き——どんなに多くの死者たちが意味を

問うても答えは得られなかった——だからこそ裁く勿れ

われわれすべてにより高い裁きが下されるのだ。

ハウスホーファのねずみたちを見る目は、まるでその「より高い」所から見下ろしているかのように冷たい。それは「笛吹き」の笛に躍らされたものたちの中にハウスホーファが自分を含めてはいないからだ。ここではそのハウスホーファ自身も、「より高い裁き」を受けるものであることが確言されている。ならばねずみたちとそれを眺めているハウスホーファの区別は、どこにあるのだろうか。

(四)

ハウスホーファがねずみたちを眺める醒めた眼差しを自身にも向けるのを忘れてはいないことは、先の『知識』に見られるように、しばしば「私」が登場することから窺うことができる。それに次いで置かれた『カサンドロ』は、それ以上に自分に接近して、自分の言動の結果について述懐している。

カサンドロ

カサンドロと役所では呼ばれた、

私がトロイアの女預言者に似て、

民族と国の厳しい幾歳にもわたる死の危難を
あますところなくすで見通していたからだ。

いつもは私の高い見識を評価してくれても、

私の警告に耳を傾けようとするものはいなかった、

人々が怒ったのは、私が怯むことなく、かれらを遮ったからだ、
不吉に未来を指し示しながら。

満帆に風を受けて　かれらはボートを駆り立て

岩礁の多い嵐の海で、

早まった勝利の知らせに歓呼しながら――

いまやかれらは難破する――そしてわれわれも。最後の苦難の中で

舵を擱もうとした手もむなしかった。――

あとはただ、海に呑み込まれるのを待つだけ。⁽³²⁾

警告した「私」とそれを無視した「かれら」。そのかれらとはハウスホーファの報告を一顧だにしなかつ

たリップントロップのみではなく、「灰色のねずみ」たちでもあろう。しかしハウスホーファの眼差しが冷たいのは、かれらが「私」の警告を聴かなかったからではない。最後の時に臨んでの努力の空しさが、あるいはその空しさを悟らせた時の隔たりが、「舵を握もうとした」自分を突き放して眺めさせている。

ここには醒めているというよりは、自棄的な雰囲気さえ漂っているが、同時にその自棄と裏腹にハウスホーファの鼻持ちならないほどの誇り、もしかしたら傲慢とさえ思われる冷たさすら感じられよう。だが最終節に至ってようやく自棄と傲慢に陥る一歩手前で踏みとどまり、みずからの信念に従った行動の結果を、たとえそれが空しいものであったにせよ、平静に受け止めようとするものの矜持が回復されている。

その誇りはただハウスホーファがドイツの危難を見通し、警告したということのみあるのではなく、究極の誠を示したソクラテスに倣うかのように最後まで難破寸前の船を救おうとした自分の誠実さにもある。

一人として自分の利益を思ったものではなく――

一人として義務感を欠いたものはなかった、

栄光と力に包まれ、死の危険の中で

国民の生活を気遣いつつ目覚めていないものはいなかった。

『同行者たち』⁽³³⁾

モルトケ、ハッセル、ポーピッツ⁽³⁴⁾などハウスホーファが「同行者」と呼ぶものたちは、「知恵と地位と名声を」持ったものたち、笛吹きや笛に踊らされたものではなく、灰色のねずみたちに「噛み殺された」ものたちだった。その中にハウスホーファが自分を含めているのは明らかだが、そうであればなおさら、

自分の命を賭けて「国民の生活（命）」を氣遣った「ハウスホーファの抵抗は人民のためのものであり、人民とともにする行為とは考えられていない」⁽³⁵⁾という評も、あながち酷に過ぎることはないだろう。ドイツの滅びの後になおそのドイツのために「たとえ大衆がその意味を理解しないにせよ」（『偉大な死者たち』）証言するのは、カントやバツハやゲーテのような「偉大な死者たち」であるとハウスホーファは言うのだが、あの「同行者たち」もまたその「偉大な死者たち」の席に列するものとかれは考えていたのだろう。

興味深いのは、ハウスホーファによって「同行者たち」として名を挙げられたものたちが、いずれもハウスホーファ同様にナチ政権の中枢に、あるいはその近くに地位を占めていたものたちであることである。ハウスホーファをも含めてかれらはもしかしたら榮譽ある「同行者Gefährten」ではなく、ナチの「協調者Mitläufer」になりかねないものたちだった。ことにハウスホーファは、ナチ政権との密接な関りを保持することによってその政策に影響を与え、体制内改革を画策し、ついにはヒトラー排除へと進んだ⁽³⁶⁾二重生活の道を敢えて選んだのだった。ハウスホーファやその「同行者たち」は、ヒトラー政権打倒という「叛逆 Hochverrat」を企てつつも売国奴 Landesverräter にはなるまい⁽³⁷⁾としたとすれば、その意味においても彼らは二重生活者だったのである。

そうした二重生活者の道を歩んだことに對する誇りを感じながら、ハウスホーファの自省的な目はみずかららの罪をも見逃してはいない。しかしハウスホーファは自分の罪は、法廷がそう呼ぶもの、「きみたちが考えている」罪とは違ふと言う。ハウスホーファは収監されて以来尋問されたことはなく、また法廷で死刑判決を受けたのでもなく、ただ殺されたただけだったが、もし法廷がその罪を呼ぶとすれば「叛逆罪」というこ

とになっただろう。だが「国民の明日のために、わたしの義務に従って／考えなかったなら、わたしは犯罪人だろう」というハウスホーファの「叛逆」は、むしろその「国民のため」のものという自信と誇りを感じうるからこそ認めうるような「罪」だった。そしてその罪こそは「知識の恵みを行動に振り向けようとした」ハウスホーファの現実参加と関っている。

わたしは胸の内で自分を告発する……

わたしは良心を長いこと欺いていた、

わたしは自分と人々とを偽っていた——

わたしは早くから不幸の行き着くところを知っていた——

わたしは警告した——厳しさに欠け、曖昧だった！

そして今ではわかつている、わたしにどんな罪があったのか

『罪』³⁸

ここでハウスホーファが「罪 schuldig」と言っているのは、国民に対する負い目、自分の「義務 Pflicht」を十分に果たさなかったことであって、決して政治的な罪のことではない。それはむしろ良心に関ることである。しかしそれは自責の念に近くて、ディートリヒ・ポーンヘファが指摘したような罪とはかなりの隔たりが認められよう。

「わたしたちは偽りが頭をもたげるのを見たのに

真実をないがしろにした。

「兄弟たちがひどく苦しんでいるのを目にしながら
わたしたちが恐れたのは自分の死だけだった。

「わたしたちはあなたの前に聖なる民として立つ

わたしたちの罪を告白しながら。⁽³⁹⁾

ポーンヘファが指摘しているのは、冒瀆的行為を目にしながら、口を閉ざし、当然果たすべき務めを怠った「かつては義と真理を護る戦士だった」キリスト者の罪 Sünde、みずからをも含んだキリスト者の罪である。そこにはハウスホーフアに見られるような突き放した冷たさはないし、自分は違うとする意識もない。しかしそれだけにかえて自己の罪を剔抉する筆鋒には落ち着いた厳しさが感じられもする。もちろんハウスホーフアにポーンヘファと同じような厳しさを求めるのは酷に過ぎよう。「精神的貴族主義による本質的に保守的な動機による反ファシズム⁽⁴⁰⁾」と評される立場を保ったハウスホーフアには、自分は違っていた乃至違っているとする意識がつきまとっているし、むしろその点にこそ誇りがあった。ハウスホーフアの負い目や罪の意識は、その違っていたものとしての自己の務めを十分に果たしえなかったという自責の念の域を大きく出ているとは思えない。「より高いもの」による「われわれすべてに對する裁き」を言いながらも、ハウスホーフアにとってその「より高いもの」も詩的イメヅにとどま⁽⁴¹⁾っている。

右のように言うのはハウスホーファにいささか厳しすぎるかも知れない。このソネット集には、ハウスホーファのドイツとその国民と自己とに対する誠実さが、その誠実さをあくまで保持し続けようとする姿が定着させられている。『雪崩』という一編には「善しにつけ悪しきにつけ思い上がりはある／わたしは償いをしていなのだ——それを押しとどめようとしたことの」⁽⁴²⁾という一節があって、雪崩を起こしたものの思い上がりとそれを、その思い上がりを押しとどめようとした思い上がりとが重ね合わされるようにして提示されている。ハウスホーファは自己の見識を恃んで、「雪崩を起こした」権力者に影響を及ぼそうとしたことを、最後まで捨て去ることのなかった矜持にもかかわらず、ここでは厳しく顧みている。「償いをしてい」とは言え、もちろんハウスホーファは信念に忠実に歩んで来た道を悔いてはいない。

(五)

わたしは多くの夢を見る 夜にもまた昼にも。

時には数量がない。わたしは忘れることができる、

過ぎ行く時間や週を計るのを、

もしそれらを意識しなければ。

だが夢もおそらくは時を感じとる。——

巡回がたてる鍵の音や

昼のスープを知らせる声に覚まされて、

大急ぎで日常世界にもどるのだ。

『時』⁽⁹⁾

ハウスホーフアはその来し方を夢の中のことのように振り返ったのかも知れない。だが、その夢から覚めた日常世界では、すでに最後の時が迫っていることをもはっきりと受け止めている。

外国の友人たちを頼れば亡命できたであろうに、その道を選ぶことなく、「故郷を離れようとは思わなかった」(『故郷』) 郷土愛の故に、「狂気だけが支配しているこの国」に留まり、「思慮深い理性」の無力(『終わりへ』) を悲痛な思いと共に悟らざるをえなかったハウスホーフアは、いまやその道の果てにあって誇りと無念さの間で、生と死の思いの間で揺れ動く自己の心象風景を、その揺れのままに記録した。見極めたいと思っていたであろうドイツの行方は、ハウスホーフアの内面の目にどのように映し出されていたのだろうか。燎原に広がった火の後の「瓦礫と灰だけ」(『非業』) なのか、砂が吹き飛ばされた後に現れる黄金と貴石のように「生まれ出る不滅なるもの」(『変化』) だったのだろうか。

ハウスホーフアが「記録」として残すことを意図したかどうかわからない。おそらく強制収容所や刑務所で書かれた多くの詩的作品がそうであったように、もっぱら自分のために書かれたものだっただろう。また「美的基準」や「倫理的基準」を当てはめて見るべきものでもない。⁽⁴⁾ さらにはこの『ソネット集』が反全体主義的抵抗に数えられるかどうかとも問題ではない。そうした抵抗を、「意識的な政治的抵抗 bewegte politische Opposition」(『社会的拒否 gesellschaftliche Verweigerung』) 「世界観的対立 weltanschauliche

「Dissidenz」⁽⁴⁹⁾と一応分類できるとすれば、たしかにハウスホーファはその最後の範疇に入れられるべきものだろう。ハウスホーファにおける抵抗は、迫り来る死の前に崩折れることなく、自己の誠実さを守り通した内面的抵抗だったと言うべきだろう。だがわれわれのなすべきことは、そうした価値判断を下すことではなく、アルブレヒト・ハウスホーファが残してくれたこの八十編の詩的作品に映し出された心象風景を真摯に跡付けることである。

〔トキスト〕

Albrecht Haushofer: *Moabitier Sonette* (MS), Deutscher Taschenbuch Verlag München 1976.

なお本文における「ネット」の言及、引用に際しては、その表題のみを記し、原文を注に挙げる場合などのみその番号(ローマ数字)を示した。

〔参考文献〕

1. Albrecht Haushofer, *Thomas Morus*. Unvollendetes tragisches Schauspiel. Hrsg. nach dem Manuskript des Autors von Hubertus Schulte Herbruggen, F. Schöningh Paderborn 1985.
2. Annedore Leber (Hrsg.), *Das Gewissen entscheidet*. Bereiche des deutschen Widerstandes von 1933-1945. Mosaik Berlin 1957.
3. Charles W. Hoffmann, Albrecht Haushofer. In: *Opposition Poetry in Nazi Germany*. Berkeley and Los Angeles 1962.
4. Charles W. Hoffmann, *Opposition und Innere Emigration*. In: *Exil und Innere Emigration II*.

- Hrsg. von P. Hohendahl u. E. Schwarz. Athenäum Frankfurt/M. 1973.
5. Chr. Zentner u. F. Bedürftig (Hrsg.), *Das große Lexikon des Dritten Reiches*. Südwest München 1985.
 6. Hans Dieter Schäfer, *Das gespaltene Bewußtsein*. Deutsche Kultur u. Lebenswirklichkeit 1933-1945. Ullstein Frankfurt/M. 1984.
 7. H. Gollwitzer, R. Schneider, u. a. (Hrsg.), *Du hast mich heimgesucht bei Nacht*. Gerd Mohn Gütersloh 1977.
 8. Hermann Graml (Hrsg.), *Widerstand im Dritten Reich*. Probleme, Ereignisse, Gestalten. Fischer Frankfurt/M. 1984.
 9. Heinz Pentzlin, *Die Deutschen im Dritten Reich*. Seewald Stuttgart 1985.
 10. K. D. Bracher, M. Funke, u. a. (Hrsg.), *Nationalsozialistische Diktatur 1933-1945*. Droste Düsseldorf 1983.
 11. Lothar Blum, *Das Tagebuch zum Dritten Reich*. Bouvier Bonn 1991.
 12. L. Poliakov, J. Wulf (Hrsg.), *Das Dritte Reich und seine Denker*. Ullstein Berlin 1983.
 13. Michael Moll, *Lyrik in einer entmenslichten Welt*. R. G. Fischer Frankfurt/M. 1988.
 14. Peter Hoffmann, *Widerstand, Staatsstreich, Attenta*. Piper München 1979.
 15. Ralf Schnell, *Innere Emigration und intellektuelle Opposition*. In: *Widerstand und Verweigerung in Deutschland 1933 bis 1945*. Hrsg. v. R. Löwenthal u. P. v. z. Mühlen. J. H. W. Dietz Nachf. Berlin 1982.
 16. Theodore Ziolkowski, *Form als Protest*. In: *Exil und innere Emigration*. Hrsg. v. R. Grimm u. J. Hermand. Athenäum Frankfurt/M. 1972.
 17. Ulrich Cartarius, *Deutscher Widerstand 1933-1945*. Opposition gegen Hitler. Siedler Berlin 1984.

18. Walter Stubbe, In Memoriam Albrecht Haushofer. In: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jhrg. 8 (1960), S. 236-256.
19. Wolfgang Brekle, *Schriftsteller im antifaschistischen Widerstand 1933-1945 in Deutschland*. Aufbau Berlin 1985.
20. Wolfgang Emmerich, Die Literatur des antifaschistischen Widerstandes. In: *Die deutsche Literatur im Dritten Reich*. Hrsg. v. H. Denkler u. K. Prüm. Reclam Stuttgart 1976.

〔注〕

(1) 一九四五年にベルリンの小さな印刷所による私的な最初の出版の機会を作ったのは、駐留アメリカ軍の将校たちであったと言われ、依頼されてその序文を書いたのは、歴史家の Friedrich Wilhelm Euler である。一般に入手可能な形では、一九四六年ベルリンの Lothar Blauvalet 書店から Reiner Hildebrandt の後書き付きで出版されたが、この時には占領軍を憚って（その後の版では四十九番目に置かれている）「われわれはみんな知っている、われわれの命は、表裏のように安っぽいのを——ドイツのロープ／首筋の突然のロシアの銃弾／イギリスの爆弾が定められた運命」という一節を含む『降り注ぐ爆弾』が削除され、全体で七十九編となっているところ。Zu den Ausgaben der „Moabiter Sonette“, MS. S. 120f.

なお、ハウスホーファの文学的著作としては、この『ソネット集』の他に古代ローマに題材を採った三部作の劇作『ヌラ』(Sulla, Berlin 1938)、『スキピオ』(Scipio, Berlin 1939)、『アウグスティヌス』(Augustinus, Berlin 1939)、『また一九四一年頃に執筆された『中国の伝説』(Chinesische Legende, Berlin 1949)、『未刊の『マケドニア人』(Die Makedonen)、『四一年のイギリス人の脱出後に逮捕拘留されていた獄中で書かれたとされる)、『また未刊の『トマス・モリス』(Thomas Morus, München 1985) などがあるが、最後のものを除いて筆者未見である。

(2) Nachwort von Ursula Laak-Michel, MS. S. 114f.

(3) Charles W. Hoffman はこのネットワーク集を「韻文を書かれた獄中日記」(Opposition u. innere Emigration, S. 132) と評し、また「チーフやキチーフが順不同に並んだパンチブック」であり、「この詩が次の詩を導く」という配列を指摘している (Opposition Poetry in Nazi-Germany, S. 58)。またハヌスホーナーのネットワークのかなりのものである「十四行の物語 vierzehnzeilige Erzählungen 以下 40の詩はなす」(Th. Ziolkowski, Form als Protest, S. 171) という詩評がある。

(4) V An der Schwelle (III・四編)

Was andere hält an Glauben, Wünschen, Hoffen,
ist mir erloschen. Wie ein Schattenspiegel
scheint mir das Leben, sinnlos ohne Ziel.

Was hält mich noch — die Schwelle steht mir offen.

Es ist uns nicht erlaubt, uns fortzustehen,

mag uns ein Gott, mag uns ein Teufel quälen.

この詩はハヌスホーナーの「自然の可能性」への「定言的拒否」が反映されていると見る見方もあり、
cf. Wolfgang Emmerich, S. 444.

(5) VI Der Schierlingsbecher (III・四編)

Nun reut mich, daß ich dort vorüberging.

Es hätte sich geziemt, ins Knie zu sinken

und wissend von dem Schierling mitzutrinken.

Es war ein Großer, der sich unterling,

des eignen Staates blinden Mordgewalten

als Opfer der Treue so zu halten.

(9) XVII Die Mücke (川・国編)

So stich nur zu, du kleine Flügelseele,
solang mein Blutgefäß dich nähren mag,
solang du sorgst um deinen kurzen Tag!

Stich zu, daß es dir nicht an Kräften fehle!
Wir sind ja beide, Mensch und Mücke, nichts
als kleine Schatten eines großen Lichts.

(7) XVIII Spatzen

Zuweilen kommt Besuch: Das Eisengitter,
für mich Gefängnis, ist für andre Rast.
Ein Spatzenpaar ist gerade da zu Gast,
ein Spatzenfräulein und ein Spatzenritter.

Sie lieben sich in Zank und Zärtlichkeit,
sie haben schäbelnd viel sich zu erzählen,
und wollt ein andrer Spatz die Spätzin wählen,
dann gäb es einen fürchterlichen Streit.

Wie seltsam ist es, ungememten Leben
in Fesseln voller Frage nah zu stehn —
ob mich die flinken schwarzen Augen sehn?

Sie schauen fort. Ein Tschlip, ein Flügelheben,
der Eisenrost ist leer. Ich bin allein.

Wie gerne möchte ich bei den Spatzen sein —

(∞) XXXI Der Schwannenring (冠)

und sag ihm : Schwannenflug bedeute Glück ...

Gedenkt er dessen, der sein Erbe trug ()

nur einen Tag im Jahr, so sei's genug.

(∞) LXXX Zeit

Ich träumte viel bei Nacht und viel bei Tag.

Die Zeit ist ohne Wert. Ich kann vergessen,

der Stunde wie der Woche Gang zu messen,

wenn ich mich nicht auf sie besinnen mag.

Doch wittern auch die Träume wohl die Zeit. —

Erwach ich dann im Dienstgeklirr der Schlüssel,

von Mittagsruf nach meiner Suppenschüssel,

und raff mich, zum Täglichen bereit :

Dann weiß ich, aus den Träumen aufgestört,

wie einer fühlt in seinen letzten Stunden,

der an ein ruderloses Boot gebunden,

den Fall des Niagara tosen hört.

Die Wasser schlagen an des Bootes Rand.
Sie strömen rasch. Gebunden ist die Hand ...

(9) LIX Wissen

Mit allen Mitteln reiner Wissenschaft
hab ich versucht, Erforschliches zu kennen,
das Klare klar, das Dumpfe dumpf zu nennen ...,
hab eignes Denken immer streng gerafft.

An Meer und Ländern hab ich viel durchstreift,
hab gleich Odysseus in bewegten Jahren
von Menschenart und Menschenleid erfahren,
allmählich ist mein Bild der Welt gereift.

Hab dann versucht, ins Tätige zu wenden
des Wissens Gabe. Doch die Unbeschwerten
verlachten hell, was mich die Winde lehrten.

Nun scheint im Dunkel aller Weg zu enden.
Das Wissen liegt gebunden vor dem Streit.
Sein bestes Erbe heißt Gelassenheit.

- (11) アルブレヒト・ハウスホーファの「歩んだ道が感動的なのは、それがほとんど類型論的姿で……ドイ
ッ抵抗運動の悲劇を具体化しているからであらう」という指摘もある。Theodore Ziolkowski, S. 164.
- (12) Karl Haushofer (1869-1946) は、バイエルンで軍務に就き、第一次世界大戦では砲兵隊に勤務、

少将に昇進。若い頃から数年間にわたり極東旅行をし、一九〇八年から一〇年まで日本に武官として派遣されたこともあり、十三年日本についての論文で博士号を取得、二一年以後ミュンヘン大学地理学教授。地理学と政治学を統合した地政学を唱導した。ハウスホーファ自身は、ヒトラーと面識もあったとされるものの、その妻がユダヤ系であったこともあり、国民社会主義の思想とは距離を保っていたが、「健全なる諸国民にとっては、その血と土地の確保が必要である」とするその「生存圏」理論が、国民社会主義的ドイツの膨張政策の学問的基礎付けになったとされる。戦後連合軍によってナチの帝国主義政策を教唆したとして告発されたが、のちに取り下げられた。ハウスホーファの教え子の一人に後の総統代理ルードルフ・ヘスがあり、そのヘスが四〇年九月に「イギリス侵攻を阻止する手だてはないか」問い合わせてきたことが契機となり、息子のアルブレヒトがイギリスとの和平交渉の可能性を探った。ヘスが四一年五月にイギリスに脱出飛行をした後には、ハウスホーファ家はその保護者を失い、カールは四四年七月二十日事件後に逮捕され、強制収容所に送られた。戦後アルブレヒトの死に強い衝撃を受け、妻とともに自ら命を断った。

(13) アルブレヒト・ハウスホーファは、十六歳でアビトゥーアを終えたのち、ベルリン大学で地理学の博士号取得、地理学者アルブレヒト・ベンクの下で助手を務めたのち、二六年「地理学協会」事務局長に就任。三四年ベルリンの政治大学 (Hochschule für Politik) で教鞭をとるようになったが、これは三三年ころからハウスホーファが個人的ブレイン役を務めるようになっていたヘスの斡旋によるものとも言われ、以後両者の間にしばしば主として外交政策に関する意見の交換が行われた。また三四年から三八年にかけては、「リッペンントロップ機関 (Dienststelle Ribbentrop)」の委託によって様々な役割も果たした。すでに早くから世界各地を旅行していたハウスホーファは、ことにイギリス事情に精通し、政治的指導層にも親しい知己を得ていたことが、こうした活動を支えていた。三七年には数ヶ月にわたって北米、日本、中国への旅行を行ったが、その日本への「旅の意図はおそらく、前年に父のカールの強力な後押しもあって成立した日本との同盟、リッペンントロップが『偉大な外交』の勝利と呼んだ防共協定を定着させることだ」と (Nachwort von U. Laak-Michel, MS. S. 105)。ここに四〇

年から四一年五月にかけて父のカールを通じてヘスの依頼を受け、イギリスとの和平交渉の可能性を検討した。その頃にはハウスホーファは、ヒトラー政権が存続する限り交渉が成立する余地はほとんどないと考えていたにもかかわらず、それまでのヘスとの関係の故に積極的に協力した。他方すでに国内の反ヒトラー抵抗グループと密接な関りを持っていたハウスホーファには、その機会を利用して抵抗グループへの連合国あるいはイギリスの支持の保証を獲得するために、みずから交渉に当たろうという意図があった。しかしその苦心は、ヘスが四一年五月十日イギリスに脱出するに及んで水泡に帰した。ハウスホーファは直後の十二日に逮捕され、ただちにオーバーザルツベルクでヒトラーに対して、自分とイギリスの結びつきおよびことにヘスとの間で検討した交渉に関して長文の報告を提出させられた（この報告については、ことに Walter Stubbe, S. 252ff. 参照）。約八週間の拘留後釈放され、教壇にもどり、最後の戯曲作品となった『中国の伝説』などの執筆を続け、また「クライザウ・クライス」など抵抗グループとの接触を保ち続けたが、その行動はゲシュタポによって絶えず監視されていた。四四年七月二十日、ヒトラー暗殺の失敗を知り、ベルリートを脱出、オーバーバイエレンの故郷パルテンキルヒェンに潜んだ。父、弟、甥なども逮捕され、ハウスホーファ自身は十二月七日、潜伏先の農家で逮捕され、ベルリーンに移送された。

(14) XXXVIII Der Vater

Ein tiefes Märchen aus dem Morgenland
erzählt uns, daß die Geister böser Macht
gefangen sitzen in des Meeres Nacht,
versiegelt von besorgter Gotteshand,
bis einmal im Jahrtausend wohl das Glück
dem einen Fischer die Entscheidung gönne,
der die Gefesselten entsiegeln könne.

wirft er den Fund nicht gleich ins Meer zurück.

Für meinen Vater war das Los gesprochen.

Es lag einmal in seines Willens Kraft,

den Dämon heimzustoßen in die Haft.

Mein Vater hat das Siegel aufgebrochen.

Den Hauch des Bösen hat er nicht gesehn.

Den Dämon ließ er in die Welt entwehn.

なぞ、この詩のモナヘーンが、『十一夜物語』の中の「漁師と天才」によるものという指摘がある。
Ch. W. Hoffmann, Albrecht Haushofer, S. 66.

- (15) 「文化の担い手は自覚して居るものたちの地上での生存圏を巡る闘いが、その人種的理想を生み出す
最高の可能性のためであるかぎり、ヤヌスの神殿の扉は開かれているに違いない。……次第に衰えつつ
ある支配民族の下にある広範囲の植民地 (Fellachentum) をもった繁栄の時代 (augstatische Zeit)
のみが、その神殿を閉ざすことができる。次いでまたそれを引き開けるために英雄的な人生観が生まれ
る。『ちやんぷん』の文化圏が閉ざられたままの扉の背後で死滅する。」 Zitiert in: L. Poliakov, J.
Wulf, S. 54f.

(9) XLVIII Das Erbe (I・四節)

In Schutt und Staub ist Babylon versunken,

ein Tempel blieb vom alten Theben fest,

von Ktesiphon zeugt einer Halle Rest,

das große Angkor ist im Wald ertrunken —

Wir sind die Letzten. Unsere Gedanken

sind morgen tote Spreu, vom Wind verflagt,

und ohne Wert, wo jung der Morgen tagt.

- (17) ハウスホーファの世界観やこの『ソネット集』を包み込んでいる雰囲気は、「キリスト教的ヒューマニズムの伝統」(R. Schnell, S. 223)、「保守的『ブルジョワ・キリスト教的ヒューマニズム』」(W. Emmerlich, S. 444) あるいは「ブルジョワ・ローマンニズム的教養の伝統」(W. Brekle, S. 227) などと評されている。また『蘇りしもの』などには「死後の生を信じるキリスト教的信仰を思わせられることもある」(Ch. W. Hoffmann, A. Haushofer, S. 75) という指摘もあるが、ハウスホーファがベルゲン・グリニーン、クレッパ、シュナイターなどのように、キリスト教的文学乃至抵抗に数えられている例は見当たらない。

- (18) そうしたハウスホーファの観察の一例を挙げれば、一九三七年八月、アメリカを経て極東への旅行の印象を次のように「地理学雑誌」に寄せている。「イギリスの生存を賭けた闘いは、合衆国を無関心な傍観者と見なしてはいない」、両大国の間には同盟関係はないが、「あたかも堅い同盟があるかのように」、両者によって巧妙な政策が遂行されるだろう。イギリスと衝突するものは、アメリカをも敵に回すことを覚悟しておくべきだろう」。Walter Stubbe, S. 240.

- (19) 一九三三年三月の国会選挙期間中の母宛の手紙。Zitiert in: Nachwort von U. Laak-Michel, MS, S. 101.

- (20) U. Laak-Michel, Nachwort zu MS, S. 104.

- (21) ハウスホーファはリッペンントロップ機関の要請を受けて三八年前後の数年間に少なくとも十四回にわたってロンドンを訪れているという。U. Laak-Michel, Nachwort zu MS, S. 105.

- (22) Zitiert in: Walter Stubbe, S. 241. イギリスの防衛整備小委員会が一九三四年一月の段階ですべて「現在のドイツは我国にとって深刻な脅威ではないが、数年後にはそうなることが必至であり、我国はドイツを将来の潜在敵国と見做し、『長期的視野に立って』防衛政策を立てて対抗する必要がある」と

いう報告を行っていたし、三八年九月にロンドン駐在のドイツ外交筋が、「ドイツのチェコスロバキアに対する攻撃は、イギリスとの戦争を意味することになることを、ドイツ政府に対して明確にするように、イギリス政府にしきりに働きかけていた」とすれば、「ハウスホーファの観測はかなり正確なものだったと認められる。

なまじの件については、Peter Hoffmann, *The Question of Western Allied Co-Operation with the German Anti-Nazi Conspiracy 1938-1944*. In: *The Historical Journal* 34, 2 (1991), pp. 437-464を参照。

(23) Walter Stubbe, S. 244.

(24) Walter Stubbe, S. 244. Stubbe は三四年に学生として初めて会って以後ハウスホーファの近くに
あつた。

(25) VII Barbaentum (十一・四節)

Ein Dschingis Chan sogar, des Blutes voll,
hat seine Streiter streng dahin beschieden,
daß man beim Bau von Schädelpyramiden
der Denker und der Künstler schonen soll.

(一節略)

So preisen wir vergangne Barbarei.

In unster Zeit sind all die Schädcl gleich.

An Masse sind wir ja so schädclreich!

(26) 強制収容所や刑務所などで書かれた詩を考察した M. Moll は、約一二〇〇編を対象としているが、当然のことごとく、実際にそれらにおいて書かれたものの数は確認しえなかつてゐる。M. Moll, S. 53.

(27) W. Brekle, S. 208.

(28) Ch. W. Hoffmann, Albrecht Haushofer, S. 60.

(29) Roland Freisler は四五年二月三日の連合軍による空爆で死亡。それが獄中のハウスホーファにどのようにして知られるようになったのか詳らかにしないが、『ソネット集』の五十番目に置かれ、「昨日四人を絞首刑にしたばかりなのに／今日は彼の死体が横たわっている」とはじまるこの一編の成立時期が、これによつて確定みれることとなる。

(30) XLI Rattenzug (I・II編)

Ein Heer von grauen Ratten frißt im Land.

Sie nähern sich dem Strom in wildem Drängen.

Voraus ein Pfeifer, der mit irren Klängen

zu wunderlichen Zukungen sie band.

So ließen sie die Speicher voll Getreide —

was zögen wollte, wurde mitgerissen,

was widerstrebte, blindlings totgebissen —

so zogen sie zum Strom, der Plur zuleide ...

(31) H. D. Schäfer, Das gespaltene Bewußtsein, S. 105.

(32) LX Kassandro

Kassandro hat man mich im Amt genannt,

weil ich der Seherin von Troja gleich,

die ganze Todesnot von Volk und Reich

durch bittere Jahre schon vorausgekant.

So sehr man sonst mein hohes Wissen pries,

von meinem Warnen wollte keiner hören,

sie zürnten, weil ich wagte, sie zu stören,
wenn ich beschwörend in die Zukunft wies.

Mit vollen Segeln jagten sie das Boot
im Sturm hinein in klippenreiche Sunde,
mit Jubelton verführter Siegeskunde —

nun scheitern sie — und wir. In letzter Not
versuchter Griff zum Steuer ist mißlungen. —
Jetzt warten wir, bis uns die See verschlungen.

一九三九年十二月十三日の母宛の手紙には、次のような一節が見られるという。「破損し、すでに何ヶ所かでは火の手があたり、それでもなお愚かなものや犯罪者たちが占拠し、繰っている船から水中に飛び込むようなことはすまじい。決心、ホースを手に取り、いつかはもしかしたら操舵レバーを握ることに機を頼む決心」。Zitiert in: U. Laak-Michel, MS, S. 103.

(53) XXII Gefährten (11・13節)

nicht einer, der des eignen Vorteils dachte —
nicht einer, der gefühlter Pflichten bar,
in Glanz und Macht, in tödlicher Gefahr,
nicht um des Volkes Leben sorgend wachte.

Den Weggefährten gilt ein langer Blick:
sie hatten alle Geist und Rang und Namen,
die gleichen Ziels in diese Zellen kamen —

(34) Helmut James Graf von Moltke (一九〇七—一九四五) は、三九年から四四年まで国防軍最高司令部で戦時国際法および国際法の専門家として勤務したが、ナチの政權掌握直後から批判的態度を持した。キリスト教的ヒューマニズムを基盤とした共同体によるヒトラー後のドイツの再建を構想し、その周囲にはキリスト教の聖職者、労働組合指導者、社会主義者など広範な反ヒトラー勢力が形成され、モルトケの領地にちなんで「クライザウ・クライス」と呼ばれるようになった。カナリス提督との協力によって軍部内の抵抗派とも結び付いていたが、キリスト教信仰の立場から暗殺には賛成しなかった。四四年一月十九日に逮捕され、シュタウフェンベルクたちによる四四年七月二十日事件の計画にも参画していなかったが、人民裁判所で死刑の判決を受け、四五年一月二十二日処刑された。ハウスホーファと直接交渉があったかどうかについては不明。

Ulrich von Hassel (一八八一—一九四四) は外交官、三二年から三八年までローマ駐在大使。三三年にはナチ党に入党したが、ヒトラーの危険な外交政策を批判し、解任された。軍部内の批判派と結び付き、開戦後にも和平交渉にロンメル將軍たちの支持を獲得しようとした。各国の指導層に幅広い交友を持ち、ヒトラー後のドイツに関する構想(君主制の復活)を説いたが、支持を得られなかった。一部の抵抗グループにはヒトラー後の政府の外務大臣に擬せられていた。七月二十日事件後に逮捕され、九月八日処刑された。ハッセルは、ポーピッツやハウスホーファと協力し、スイス経由で連合国側からドイツ国内での政權交代の場合の保証を入手しようと画策した。

Johannes Popitz (一八八四—一九四五) は、税制の専門家として知られ、党員ではなかったが、三三年ナチによる政權掌握後に大蔵大臣として招聘された。のちナチのユダヤ人政策に反対して辞任を申し出たが、拒否された。ヒトラー後のドイツのための「暫定的国家基本法」を作成した。七月二十日事件の推進派からは、文化大臣、大蔵大臣に擬せられていた。ハウスホーファはポーピッツとは緊密な結び付きがあり、ヒトラー暗殺の失敗を知ったのもポーピッツの事務所を訪れていた時のことだという。

この項は Chr. Zentner u. a.: Das große Lexikon des Dritten Reiches などによる。

(35) W. Brekle, S. 229.